

『平忠盛集』本文考

犬井善壽

〈一〉

『平忠盛集』『平忠盛朝臣集』『忠盛集』、あるいは、『故刑部卿集』『故刑部卿詠』と、種々の呼称のある、平忠盛の家集であるが、その本文は、知られるように、流布本系と異本系という、二つの異種本に大別される。流布本系とは、『続群書類従』⁽¹⁾や『続国歌大観』⁽²⁾に収められている、四季・恋・雑の二九首に「見勅撰歌」九首を末尾に付載した、都合三八首の忠盛詠を載せる系統である。異本系は、その伝来が世に知られてからあまり長くはないものなのだが、『古典文庫』⁽³⁾や『私家集大成』⁽⁴⁾に翻刻された谷山茂氏蔵本と日本大学図書館蔵本（稿者は未見）との二伝本のみが知られる、谷山本でいうと、他人詠・重出歌を併せて都合一九〇首の歌が載る系統である。谷山氏は、異本系のことを「広本」「広本系統」と呼び得ると言われたが、⁽³⁾所載の歌数でいうと、まさに、異本系が「広本」、流布本系が「略本」と呼ぶにふさわしいのである。

この平忠盛の家集について、あるいは、忠盛の歌に関しては、流布本系の本文のみが知られていた段階では、その所載歌数の少なさも与ってか、検討されることがあまり無かったと言ってもさしつかえなさそうであるが、谷山氏蔵の異本系本文が紹介されて後、研究が飛躍的に進展した。即ち、谷山氏に依る、「平家物語と異本忠盛集」⁽⁵⁾、古典文庫『中古私家集二』⁽³⁾における翻刻と解題（樋口芳麻呂氏と共編）、「平家の歌人」⁽⁶⁾、『私家集大成中古2』⁽⁴⁾

における翻刻と解題(黒川昌亨氏と共同担当)、という一連の御研究が、忠盛の歌の研究の進展の中心である。それに、井上宗雄氏に依る、『平安後期歌人伝の研究』⁽²⁾中の「平家の歌人たち 一 平忠盛の歌人形成」が、最も最近の忠盛研究の大きな成果であると言つてよい。

谷山氏や井上氏その他の諸先覚の御研究に依つて、『平忠盛集』の二系統本文の公刊もひとまず済み、二系統間の歌の出入り、二系統各々の構成や組成、勅撰集や私撰集への入集状況、といった本文研究、二系統本文との関連における、特に異本系本文からする、忠盛の伝記的研究、忠盛歌の歌風の検討や平家歌人としての和歌史的位付け、といった作品批評的研究、という具合に、諸方面からする『平忠盛集』の研究が、進展しているのである。稿者の最大の関心事である、『平家物語』における忠盛像造型と『平忠盛集』等から窺える歌人忠盛との重なりや離れ、という問題も、谷山・井上両氏の御研究において、興味深い御検討が、既に幾つも試みられているのである。

ところで、『平忠盛集』に関する従前の研究を見ると、本文研究の内、二系統間の歌の出入りや他集との関連等の面は、十分なさされているのだが、各々の歌や詞書の本文の差異等に触れられることは、あまり無かつたようである。諸先覚の御発言は、細部にわたる本文吟味を経たものであるが、その御発言や御推測の中のかなりのものが、稿者自身の本文調査を重ね合せて見るとき、各々の歌や詞書の細部にわたる本文批判からする検討に依つて、その蓋然性がさらに高くなることが多いのである。

本稿において、稿者は、諸先覚の御調査や御研究に導かれつつ、『平忠盛集』について、主として本文の吟味を行ない、異本系本文の形成と流布本系本文の問題、それに、両系統の流れに関して、私見を述べ、大方の御叱正を賜りたいと思う。

調査は、『私家集大成』⁽⁴⁾に依り、異本系はその「75忠盛Ⅱ」の谷山茂氏蔵本、流布本系はその「74忠盛Ⅰ」の神宮文庫蔵本に依ることにするが、異本系については『古典文庫』⁽³⁾を参照し、流布本系については管見に入った

数本の本文をも適宜参考にしつつ、進めて行くことにする。

〈二〉

『平忠盛集』の本文を吟味するにあたっては、異本系の一九〇首と流布本系の三八首各々について、まず、その組成を検討し、全体としての整理をつけておいて、二系統の所載歌を対照する必要がある。以下、専ら歌番号に依って、その整理を示してみる。但し、本節に示す事柄の多くは、谷山氏が、古典文庫『中古私家集二』⁽³⁾において異本系本文を翻刻された際に、併せて示されたものである。次節以下の検討のため、谷山氏の御調査に依りつつ、稿者なりの調査を若干加えてみたい。

流布本系の三八首が、『和歌文学大辞典』に「四季・恋・雑と計二九首。それに〈見勅選歌〉として九首が付けられている」とあるように、歌の整理としては質を全く異にする、二つの歌群から成っていることは、早くから指摘されている。『私家集大成』の解説に、

所収歌三八首が、(A)部類歌二九首と(B)「見勅撰歌」九首(金葉3、詞花、千載、新古今、続後撰各1、玉葉2)の二群に分かれ、多くの伝本が、この両群の間に「右一冊者為家卿以自筆之本不違一字書寫了」の本奥書を持っている。

という適切な整理があり、本稿においては、一番から二九番までの、四季・恋・雑の部類歌群を(A)、三〇番から三八番までの、「見勅撰歌」群を(B)と、その略号を借用させて頂く。

異本系の谷山本が、一九〇首全体として整理された一まとまりの集となっていないのではなく、幾つかの歌群から成り、それぞれの歌群が形成を異にするらしい、ということが、谷山氏等に依って明らかにされている。本稿の課題と大いに関わる問題でもあり、この件については、以下、いささか詳しく整理してみる。

谷山氏が異本系の歌群について示された御見解は、最初は「巻頭から一一のうまでには百首歌があり、次にだ

いたし春夏秋冬恋雑に部類された歌どもがならび、更に二〇の才あたりから後にはまた雑然といろいろな歌がのせられてゐる」といふ三歌群説であつた。谷山本の「一丁裏は一〇〇番の詞書の中程まで、二〇丁表は一四四番の歌の第三句から、ということだから、一〇九九、一〇〇〇、一四四、一四五、一九〇、という三歌群説となる。

この三歌群説は、古典文庫本の「解題」⁽³⁾でもほぼ同様である。「最初に崇徳院の召された久安六年の百首歌が収められている」「この百首の次の歌どもは、一〇〇番から一四二番あたりまで、だいたい春夏秋冬恋雑の順で並べられているようである」「さらに一四三番あたりから巻末までは、ほとんど部立もなく、いろいろな歌が雑然と収められている」といふもので、先きの説と異なるのは、一九丁裏の中程にあたる「一四三番あたり」以後を第三の歌群とされたところのみなのである。

ところが、『私家集大成』⁽⁴⁾の「解説」に至り、谷山氏と黒川昌享氏は、四歌群説を示された。それは、

谷山本は、総歌数一九〇首で、それはさらに A 「刑部卿忠盛百首」(一〇〇、一四二)、C 雑纂歌群(一四三、一七二)、D 部類歌群(一七三、一九〇)の四群に分けて考えることができる。

という考え方で、前の二説の第三の歌群を、さらに二分されたもの、ということになる。一七二番と一七三番の間に「二行分の空白がある」こと、杉谷寿郎氏の教示として、日本大学図書館蔵本では「谷山本の一六九・一七〇・一七一番歌および巻末の一八首(一七三、一九〇)にあたる部分がない」事実を示し、「日本本は、このD歌群にあたる部分が全くない形になっている」こと、などが、一七三番以降を一つの歌群とされた理由であろう。

『私家集大成』⁽⁷⁾に示されたこの四歌群説について、井上宗雄氏は、おおむね従われたうえで、以下のような御見解を示された。

B の部分は春・夏・秋・冬・恋・雑(哀傷・連歌^旅・無常)という事になるが、一四三・一四四までがBに含まれるのではないか、とも思われる。一四三は女性と関わる歌だが、「きそぢのはし」といふ女性で、一見、旅歌風でもあり、一四四は旅または別の歌であり、かつ詞書の敬語法がBと一致している。ここまでは一応整頓された部類歌集で、比較的早く成立

し、次にCは一四五と一五六が一応部類され、一五七以後が雑纂未定稿らしい。

一〇〇番から一四四番までをB歌群とする、という氏の見方は、「二〇の才あたり」に歌群の区切りを認められた、谷山氏の最初の考え方と合致することになる。井上氏は、C歌群もさらに二分できるとされるわけだが、五歌群説というところまでの御考えではないらしく、「D歌群」という把握を認めておられる。氏の御考えは、部類等の集の構成、詞書の敬語法（『平忠盛集』の詞書の中に、忠盛に対する敬語表現が見られる。）の使い方、という証拠が示されているのである。

稿者は、『私家集大成』の四歌群説に補訂を試みられた、井上氏の四歌群説に従い、異本系を、一と九九番、一〇〇と一四四番、一四五と一七二番、一七三と一九〇番という、四歌群でとらえたい。井上氏が部類および敬語法を証拠とされる点に、納得が行くからであり、後述するが、重出歌の検討に依って、稿者なりに、少なくとも一四四番までは第二歌群と見るのが妥当と思われる証拠が見出せたからである。歌群の呼称は、『私家集大成』に従って、順に、A・B・C・Dと呼ぶことにする。

流布本系が(A)・(B)の二歌群から成り、異本系がA・B・C・Dの四歌群から成ることを、諸先覚の御研究を整理することで、明らかにしてみた。『平忠盛集』に関する本文研究は、集全体を見る場合も、個々の歌を見る場合も、全て、この歌群という点を考慮せざるを得ないのである。歌群の把握が、この集の本文研究の出発点であり、かつ、帰着点ともなると言えそうである。

例えば、流布本系と異本系の形成の先後関係という問題ひとつ取り出してみても、二系統をそのまま比較する訳に行かず、まず各々の歌群の形成の先後の問題の吟味が必要になる、といった具合である。個々の歌の扱いにしても然り。その位置する歌群に依って、その形成も、作歌事情も、異なる可能性がある。次節以下の本稿は、そういった問題の検討のための準備としての、稿者なりの本文研究の一端なのである。

いま、個々の歌が、その位置する歌群に依って、意味を異にする、と述べたが、これと関わるのが、異本系に

おける重出歌の存在という事実である。谷山氏は御蔵書を世に紹介された最初から「前後に約十四首の重出歌」が見られることを明らかにされており、稿者未見の日大本でも、「一六九・一七〇・一七一番歌および巻末の一八首（一七三・一九〇）にあたる部分がない」という杉谷氏の御調査に従うと、一首の重出歌が存することになる。谷山氏が重出歌を「約十四首」と言われたことは、稿者なりの調査で、納得が行く。一四首の重出は間違はなく、他に、改作と見てよい程の異文の大きい類似歌が存するからである。ともあれ、『平忠盛集』を考へるにも、忠盛歌を考へるにも、異本系の重出歌の本文の吟味は、かなり重要な意味を持つてくる。

流布本系と異本系の『平忠盛集』所収歌の中には、勅撰集や私撰集、また、別人の家集にも収められている歌が、幾首かある。「金葉集以下の勅撰集に一七首入集⁽³⁾」していること、『後葉集』『統詞花集』『月詣集』『万代集』『夫木抄』の諸私撰集に採られていること、等は既に整理がついており、他に、『金葉集』研究の方面で、その続群書類従所収の初度本にのみま一首入集していることが指摘されている。別人の私家集では、『平経盛集』に一首忠盛詠が収められているのが、管見に入っている。歌集ではないが、『今鏡』『平家物語』にも、忠盛詠をめぐる話がある。これら、他の歌集などに載る忠盛の歌も、『平忠盛集』の本文を検討するにあたり、また、忠盛歌を吟味するにも、大事な材料となるはずである。

異本系が四歌群、流布本系が二歌群から成ること、異本系には重出歌があること、『平忠盛集』中に勅撰集等他の歌集にも収められた歌があること、を整理してみた。以上の事柄に、異本系と流布本系の共通所載歌を対照し、併せてまとめたのが、次に掲げる表である。異本系の歌序に依るものと、流布本系の歌序に依るものとの双方を掲げ、末尾に、両系統には載らない歌で忠盛歌とされているもの三首を、補として示し、参考に供した。

異本系の一七九番を上と下に分けたのは、後述するが、谷山氏が、この歌の上句と下句は「それぞれ別の歌の上下句であつたろう。したがって、これは二首と見なすべきかもしれない⁽³⁾」とされたことに依る。稿者なりの調査でも、この歌の上句と下句の「間には脱落があるらしく⁽³⁾」とする谷山説が、首肯できる。

この表から、種々の興味深い事柄が読み取れるのだが、それらは、次節以下に詳しく触れるとして、ここでは

異本系所収歌一覽

私撰集その他	勅撰集	流布本系		異本系			
		(B)	(A)	D	C	B	A
							1
							2
							3
月詣1月			2				4
			1				5
							6
							7
							8
							9
							10
	続拾遺 80		4				11
							12
							13
夫木 卷4				176			14
							15
							16
							17
							18
夫木 卷6, 歌苑抄	新後撰 148						19
							20
							21
	新千載 255		13				22
							23
							24
							25
				177			26
							27
月詣5月				178			28
							29
							30
							31
			15				32
							33

私撰集その他	勅撰集	流布本系		異本系			
		(B)	(A)	D	C	B	A
			16	180			34
							35
							36
							37
							38
							39
							40
							41
							42
							43
			20	184			44
							45
							46
							47
							48
							49
							50
							51
							52
							53
							54
夫木 卷 17							55
							56
							57
							58
			23	186			59
							60
(冬 11 首目)					170		61
							62
							63
							64
	千載 731	34					65
							66
							67

私撰集その他	勅撰集	流布本系		異本系			
		(B)	(A)	D	C	B	A
							68
							69
							70
							71
							72
							73
							74
							75
万代 卷 11	続後撰 840	36	24	187			76
							77
							78
							79
							80
							81
							82
夫木 卷 24							83
							84
							85
							86
							87
							88
							89
							90
							91
							92
							93
							94
							95
							96
							97
							98
							99
							100
							101

私撰集その他	勅撰集	流布本系		異本系			
		(B)	(A)	D	C	B	A
(金葉他本ナシ)	金葉, 初度本					102	
						103	
後葉 卷 9	詞花 274		6			104	
	風雅 209		5			105	
						106	
						107	
						108	
						109	
						110	
						111	
			19	183		112	
平家物語	金葉 229	30				113	
	詞花 296	33				114	
今鏡	金葉 607	31				115	
						116	
						•117	
(金葉、伝良経本ナシ)	金葉 253					118	
						119	
						120	
	新古今 1550	35			168	121	
					169	122	
続詞花 卷 6			22	185		123	
						124	
						125	
						126	
続詞花 卷 13						127	
						128	
						•129	
						130	
						131	
						132	
						133	
						134	
						135	

私撰集その他	勅撰集	流布本系		異本系			
		(B)	(A)	D	C	B	A
後葉 卷 15, 今鏡 続詞花 卷 19	金葉 661 玉葉 2397	32	29	182	190	136	
						137	
						138	
						139	
						140	
						141	
						142	
夫木 卷 4 夫木 卷 26, 経盛集 (日大本ナシ)	統後拾遺 171	12				145	
						146	
						147	
						148	
						149	
						150	
						151	
						152	
						153	
						•154	
						155	
						156	
						157	
	158						
	159						
	160						
	161						
	162						
	163						
	164						
165							
•166							
167							
168	121						
169	122						
	新古今 1550	35					

私撰集その他	勅撰集	流布本系		異本系			
		(B)	(A)	D	C	B	A
(日大本ナシ)					170		61
(日大本ナシ)					171		
					•172		
(以下、日大本ナシ)				173			
				174			
				175			
夫木 巻 4				176			15
				177			26
月詣 5 月				178			28
				179 _上			
			14	_下			
			16	180			34
			17	181			
			18	182		142	
			19	183		112	
			20	184			45
続詞花 巻 6			22	185		123	
			23	186			59
			24	187			75
			25	188			
			26	189			
			27	190		144	

流布本系所収歌一覧

私撰集その他	勅撰集	流布本系		異本系			
		(B)	(A)	D	C	B	A
月詣 1 月			1				5
			2				4
			3				
	続拾遺 80		4				11
	風雅 209		5			105	
後葉 巻 9	詞花 274		6			104	

私撰集その他	勅撰集	流布本系		異本系			
		(B)	(A)	D	C	B	A
			7				
			8				
			9				
			10				
			11				
	続後拾遺 171		12		148		
	新千載 255		13				22
			14	179下			
			15				32
			16	180			34
			17	181			
			18	182		142	
			19	183		112	
			20	184			45
			21				
続詞花 卷 6			22	185		123	
			23	186			59
			24	187			75
			25	188			
			26	189			
			27	190		144	
			28				91
後葉 卷 15, 今鏡	玉葉 2397		29			139	
平家物語	金葉 229	30				113	
今鏡	金葉 607	31				115	
	金葉 661	32				138	
	詞花 296	33				114	
	千載 731	34					65
	新古今 1550	35			168	121	
万代 卷 11	続後撰 840	36					76
夫木 卷 26	玉葉 1218	37			155		
	玉葉 2755	38			156		

平忠盛集不載歌一覧

私撰集その他	勅撰集	流布本系	異本系	
月詣 卷 1 賀 今鏡前田本藤波上				補 1
夫木 卷 20				補 2
				補 3

(注) ・印を付した歌は、他人詠。全て、直前の忠盛詠贈歌の返歌。

現在の資料条件の中で集の歌とされてよいのは、異本系の一九〇首中から重出歌一首を除いた一七六首(但、一首は上下句が別歌)、流布本系のみ記載の(A)歌群の三番・七・十一番・二一番の七首、両系統には見られず補として示した三首、の都合一八六首であること、そのうち異本系と流布本系とで共通するのは、流布本系三八首からこの系統にのみ載る先きの七首を除いた、三一首であること、これだけを示しておく。

〈三〉

『平忠盛集』における二種の系統各々の本文の性格を明らかにするために、本節においては、まず、「前後に約十四首⁽⁵⁾」あるという、異本系の谷山本の重出歌について検討する。

さきに示した一覧でも表われているのだが、異本系における「約十四首」の重出歌とは、

A 歌群 一五(D一七六)、二六(D一七七)、二八(D一七八)、三四(D一八〇)、四五(D一八四)、五九(D一八六)、六一(C一七〇)、七五(D一八七) 計 八首

B 歌群 一一(D一八三)、一二(C一六八)、一二(C一六九)、一二三(D一八五)、一四二(D一八二)、一四四(D一九〇) 計 六首

である。一見して判るように、同一歌群内での重出歌は一首も無い。この事実を、まず確認しておく。それに、A・B両歌群間の重出も、全く無い。A・Bそれぞれに、C歌群もしくはD歌群との間の重出歌が存するだけである。この事実も、実は、注目されてよい。

いまの整理の読み替えではあるが、C・D歌群から見た重出歌の様子を整理してみると、

C歌群 一六八(B一二二)、一六九(B一二二)、一七〇(A六一) 計 三首

D歌群 一七六(A一五)、一七七(A二六)、一七八(A二八)、一八〇(A三四)、一八二(B一四二)、一八三(B一一二)、
一八四(A四五)、一八五(B一二三)、一八六(A五九)、一八七(A七五)、一九〇(B一四四) 計 十一首

となる。同一歌群内での重出は皆無であること、C・D両歌群間の重出歌も無いこと、などA・B歌群の場合と同じことが確認できる。

要するに、異本系における重出歌を整理してみると、各々の歌群の中では重出しないこと、A・B歌群とC・D歌群との間で重出すること、が判るのである。特に、後者の事実から、B歌群とC歌群の間に大きな区切れがあるらしいことが明らかになったのである。いま一つ、C歌群の歌で他歌群との間で重出することは、一六八・一六九・一七〇と三首連続しているこの部分に限られるという事実も、注目されるのである。

犬 井 善 犬
ただし、ここに、前節で問題になった、B歌群の覚え方が関わってくる。『私家集大成』等の谷山氏説のごとく、一〇〇〜一四二番をB歌群とし一四三番以下をC歌群と捉えると、一四四番と一九〇番との重出は、C歌群とD歌群との間の重出ということになるのである。

しかし、C歌群とD歌群との間の重出歌は他には全く無いこと、C歌群の歌もD歌群の歌も、A歌群かB歌群との間で重出すること、これらの事実を知るとき、一四四番と一九〇番との重出も、やはり、C歌群とD歌群との間の重出とは把えない方がよからう。つまり、井上氏の言われたように、一四四番までをB歌群と見れば、この重出歌も、B歌群とD歌群の間の重出ということになり、例外ではなくなるのである。前節において、井上氏の四歌群説に従うとしたのは、以上のような、一四四番をB歌群と見る証拠が見出せた事によるのである。

『私家集大成』の「解説」に、

A B両歌群は、詞書の表記も整い(忠盛に対する待遇表現は、「尊敬」で統一)、両群相互の重出歌もなく、よく整理され

ているが、C D 歌群は、詞書の表記も不統一であり（忠盛に対して「尊敬」「謙讓」の両様を用いる）、また A B 歌群との間、C D 歌群相互の間に重出歌が見えるなど、未整理の跡が顕著である。

とある。異本系における重出歌の存在が、この系統の「整理」「未整理」のあらわれの一要素であるか否かは、後程考えるところとして、「A B 両歌群は……両群相互の重出歌もなく、は稿者も確認できたが、「C D 歌群は……A B 歌群との間、C D 歌群相互の間に重出歌が見える」とあるうち、「C D 歌群相互の間」の重出は、一四三番以下を C 歌群とする把え方に依るもので、稿者の整理とは異なることになるのである。

ところで、異本系の四歌群という事実と重出歌の存在という事実を重ねて見るとき、A B 両歌群と D 歌群との間の重出が多いという事実が気付く。一四首の重出歌中の一首までが、D 歌群と重なるのである。D 歌群は全体で一八首であり、その内の一首が重出歌になるのである。それに、A 歌群と重出する D 歌群歌は、必ず A 歌群歌の順で重出する（一五・二六・二八・三四・四五・五九・七五）という事実も、興味深い。尤も、A 歌群は、既に谷山氏が検討しておられるように、現行のものから除かれてはいるが『久安百首』であり、四季・恋・雑と並んでおり、D 歌群も「部類歌群」であるから、A 歌群と D 歌群の重出歌の歌序が逆行しないのも、当然だが。

D 歌群に他歌群との重出歌が多いという事実は、書誌的な面での歌群が少々特別の扱いをされていることと関係があるかも知れない。谷山本では、C 歌群と D 歌群の間、つまり一七二番と一七三番の間に、「コノ間一首分ノ空白アリ」⁽³⁾「C 歌群末、D 歌群の前に二行分の空白がある」⁽⁴⁾という書写上の特別扱いがある。一七三番以下の D 歌群は、一首分に相当する二行分の空白を置いて、それ以前とは別の扱いをされて写されていると見ざるを得ない。しかも、「日本本は、この D 歌群にあたる部分が全くない形になっている」⁽⁴⁾という事実は、D 歌群の特殊性の一端を示しているとも言える。

いま一つ、C 歌群に関わる重出歌も、注意されてよい。前述のごとく、C 歌群の重出歌は、一六八・一六九・一七〇と連続した三首以外は見当たらないのであるから、興味深い。

C歌群の重出歌は、一六八と一七〇の三首だが、一六九と一七一の三首が日大本には欠けているという事実と、無関係ではなさそうである。「一六九・一七〇・一七一(1)番歌」が日大本で欠ける由だが、一七一番は、次のことによる。一七二番の小大進詠との贈答歌であるから、日大本は、忠盛詠の贈歌を欠いて小大進詠の答歌を載せる、ということになる。一七二番の小大進詠は、一六八番の「遍照寺にて」という月見の歌に応じる歌ともなっていない。かような日大本の歌の脱落は、不自然で、全く物理的な事情でこの三首が欠けたと考えざるを得ないのである。それが、全くの仮定だが、一六八と一七〇番が日大本には載らない、というのなら、日大本には重出歌が一首も無いことになるわけで、つじつまがよく合うことになる。それは、日大本の調査の機会が得られたら確認するとして、「一六九・一七〇・一七一番歌および卷末の一八首(一七三と一九〇)にあたる部分がない由」の日大本には、一六八(B)一七二の重出歌が、唯一の重出として、残ることになるわけである。

いま一つ、一七〇番がA歌群の六一番と重出する点は、看過できない。六一番は、『久安百首』歌群であるA歌群の「冬十首」の末尾の歌なのだが、A歌群の「冬十首」は、既に指摘があるように、五一番からこの六一番まで、一首も載るのである。谷山氏は、「十一首あるのは草稿として一首余計に作っておいたのか、それとも全然別箇の歌が混入しているのか明らかでない」とされる。その歌は、

六一 日をへつゝかしらにつもるしらゆきのいくとせへてかきえんとすらん

というものだが、C歌群の一七〇番では、「おひ」の詞書のもと、第二句を「たゝえにつもる」として収められているのである。この歌は、たしかに冬歌としても通るが、C歌群におけるように、「老」という述懐歌の意が極めて強いことも事実である。一七〇番の「たゝえにつもる」は、『古典文庫』に「かしらカ」と六一番の語句を是とする注記があり、『私家集大成』に「ママ」と不番を示す注があるように、このままでは妥当でない。しかし、「冬十首」として載せられた一首目の六一番が、「老」という述懐歌としてC歌群の一七〇番に重出する事実は、重視したい。

異本系のA歌群九九首は、『久安百首』歌なのだが、群書類従所収『久安六年御百首』の歌数と比べると、「冬十首」が一首多く、「物名二首」のところが九九番一首のみに減り、「短歌一首」つまり長歌が無く、差引き九九首と、百首歌に一首少ないのである。⁽¹⁾『平忠盛集』に無い長歌は如何ともし難く、さきの六一番を含めて「冬十首」の一首を、一首欠ける「物名」の可能性はないかと吟味してみたが、納得の行く解は得られなかった。大方の御教示を得たいが、稿者は、今のところ、『久安百首』であるA歌群中に、C歌群に「老」という述懐歌として収められる内容の歌が、つまり「全然別箇の歌が」、六一番として「混入している」と解しておくことにする。

異本系における歌の重出について、あらましを見てきたわけだが、重出歌をめぐって、さらに大きな問題がある。それは、いま六一番と一七〇番との重出歌は、詞書にも歌にも異文があることに言及したが、さようなことが、重出歌の殆どに見られるという事実である。以下、重出歌相互の本文を検討してみる。

A歌群は、『久安百首』歌であり、個々の歌には詞書が無い。「春廿首」(一一〇)、⁽²⁾「夏十首」(二一〇)、⁽³⁾「秋二十首」(三一〇)、⁽⁴⁾「冬十首」(五一〇)、⁽⁵⁾「恋廿首」(六二〇)、⁽⁶⁾「雑二十首」(八二〇)とあるだけで、A歌群と重出する他歌群の歌には、全て、具体的な詞書が見られる。

一五—D一七六「海辺花」

二六—D一七七「五月雨」

二八—D一七八「橘」

三四—D一八〇「旅宿草花」

四五—D一八四「社頭紅葉」

五九—D一八六「同心(新院御会暁千鳥)」

六一—C一七〇「おひ」

七五—D一八七「恋」

C・D歌群に収められている方は、全て、題詠歌の歌題の形式の詞書が付いているのである。この事實は、A歌群とC・D歌群の形成の流れと関連があると考えざるを得ない。A歌群が先行するのなら、これらは、もともと詞書の無かった歌に題詠の歌題の詞書を付したことになり、逆にC・D歌群が先行するのなら、A歌群つまり『久安百首』をまとめる際に、詞書を外して定数歌に改めたことになる。この問題は、種々の問題を検討した後に、稿者なりの決着をつけることにしたいと思う。

B歌群とC・D歌群との間の重出歌六首の内、一二二番と一六九番の重出には、詞書にも歌にも異文が無いが、他の五首は、詞書の異文がかなり大きい。その全てを例示すると、

一二二「丹後殿とすはの山庄にて、山家暁月といふことを」D一八三「山家院月」^曙

一二一「あれたるやとの暁月」C一六八「暁照寺にて」

一二三「千鳥」D一八五「新院御会、暁千鳥」

一四二「無常」D一八二「古郷月」

一四四「あつまへくたせたまひけるに、為義、上野にて馬まいらせたりけるに」D一九〇「おはりへ下向し侍りけるに、為義かのみといふところに、馬をひきたりければ」

である。量の上で異文の大きいもの、質の面で異文の大きいもの、様々だが、とにかく、詞書の本文の異文の大きさは、注目されてよい。これらも、B歌群とC・D歌群の形成の問題と関わるわけだが、後程、改めてまとめてみる。

詞書に異文が目立つのみではない。重出歌相互に、歌語に異文が散見する。歌に異文の無いのは、さきに触れた一二二―一六九の外は、二八―一七八、一二二―一八三、一四四―一九〇の、都合四首のみなのである。

一五 あはちしまいそわのさくらさきにけりよきてをわたれせとのしほかせ

いそわ―いそきは(一七六)

- 二六 とのりものとも宮つこいとまあれや日かすふりゆく五月雨のそら
 そら—ころ(一七七)
- 三四 くさまくらたひねのとこのをみなへしひと夜はかりの契とやおもふ
 とや—もや(一八〇)
- 四五 みかさやまいかて木の葉のみつらんしくればよその物とこそみれ
 よそ—よは、みれ—きけ(一八四)
- 五九 よさのうらのまつかせさむみねさめする有あけのそらにちとりなく也
 そら—月(一八六)
- 六一 (前掲)(一七〇)
- 七五 つらきにもうきにもをつるなみたかはいつれのかたかふちせなるらん
 かは—かな(一八七)
- 一二一 すみきけんむかしの人はかけたえてやともるものはありあけの月
 すみきけん—すたきけん(一六八)
- 一二三 ありあけの月のてしほやみちぬらんうらつたひしてちとりなくなり
 ありあけの—あけあけの、うらつたひ—磯つたひ(一八五)
- 一四二 いつくともつきはわかしをふるさとほものさひしかるかけそゝひける
 かけそゝひける—かけをゝひける(一八二)

一七六番の「いそきは」は字余りになり、一七〇番の「たゝえ」は前述のように不審があり、一八五番の「あけあけの」も意味不通で、それぞれ、一五・六一・一二三の本文を採るのが妥当である。こう見ると、D歌群の本文は採れそうにないようにも見える。しかし、他は、異文はあっても、いずれの本文でも解が可能であり、一方が他方へ改めたのではあるが、いずれが先かは、慎重を要するものなのである。

とにかく、異本系の重出歌相互には異文が多い、という事実は明らかにできた。十四首の重出歌が、一首を除

いて、詞書もしくは歌に、あるいはその双方に、異文が見られるのであるから、異本系の重出歌は、単純な重出ではない、と言うべきであろう。同一歌ではあるのだが、異伝歌と見られたことがあった、という可能性があるのである。なにする、異なる歌群間でのみ重出現象が見られるのであるから。

稿者は、異本系における歌の重出は、未整理のあらわれとは言えないのではないかと考える。A・B・C・Dの四歌群が、それぞれ集の中の歌群という以上に強いまとまりの単位で、むしろ独自の集としてまとめられ、それが現存の谷山本のように集められたのではないかと、という仮説を立てて考えている。同一歌群内には重出が無いこと、重出歌がD歌群との間に偏ること、重出歌相互に異文が目立つこと、などは、その仮説を検証して行く過程で明らかになった、証拠の一部なのである。次節以下に、他の証拠を提示したい。

〈四〉

次なる問題は、異本系と流布本系の関係である。両者の間で、前述のように、三一首の歌が共通している。それは、異本系では一九〇分の三一に過ぎず、流布本系では三八分の三一にもなる。数の多寡はともかく、二系統の共通歌の本文比較を含めて、両者の比較は進んでおらず、その先後関係も、未だ確とした解答は出ていない。『私家集大成』⁽⁴⁾の解説に、

D歌群(異本系の・稿者注)の末尾一二首(一七九、一九〇)は本文・配列とも第一類本部類歌群(流布本系(A)歌群・稿者注)のそれとほぼ完全に一致していて、D歌群の成立は第一類本と密接な関わりを持つかと推測される。……未整備のC D歌群の中でもD歌群はかなり遅れての追加部分であり、それは第一類本系資料によってなされた可能性が強く、日本は、D歌群追加以前の形態を示すものといえる。

とあるのが、二系統の先後関係に関する数少ない発言の中の一つである。しかも、本節で明らかにするように、重大な発言である。本節においては、流布本系の本文の吟味と検討を通して、異本系との関係を探ってみたい。

流布本系は、先に整理したごとく、「(A)部類歌二九首と(B)『見勅撰歌』九首」の二歌群から成っている。部類歌群に載らず勅撰集に見える歌を拾って付載したというのだから、これは、当然、(A)歌群が(B)歌群に先行する。『私家集大成』は、「本来は(A)の部分のみであつて、(B)は後人が鎌倉末期(玉葉集成成立の正和元年)以後、風雅集成の正平元年(35)以前に追加したものである」と「解説」している。

前引のように、(A)歌群と(B)歌群の間に「右一冊者、為家卿以自筆之本不違一字書寫了」という奥書がある。「為家卿自筆之本」というのではないから、このまま讀むと、為家が忠盛自筆本を寫した本の寫ということになるが、それでは「書寫了」に為家への敬意が無いわけで、不審である。また、忠盛自筆本というのなら、「はりまよりのほり給けるに」(三番)、「はりまのかみにてくたり給ひて」(一七番)、「をはりへ下向し給けるに」(二七番)等の忠盛への敬語が不自然である。管見に入つた流布本は、全て「為家卿以自筆之本」とはあるが、こゝは、為家自筆の本の寫と解する方がよからう。いずれにしても、この奥書には内部矛盾があり、そのまま信用はできないが、建治元年(一二七五)没の為家が流布本流伝に關与したという伝承がある、という事實は、この集が、敬語法の面では他家集であると考えざるを得ない点もあつて、貴重である。

(B)歌群の「見勅撰歌」が『玉葉集』入集歌までを載せていることから、『私家集大成』では、「玉葉集成成立の正和元年(32)以後、風雅集成成立の正平元年(35)以前」の追加とされる。しかし、『風雅集』や『新千載集』入集歌は、流布本では既に(A)歌群に載るわけで、「見勅撰歌」として追加する必要はない。(B)歌群が『玉葉集』成立以後の追加であることは間違いないが、『風雅集』以前の追加と断定はできない。

ともあれ、流布本の場合、(A)歌群の形成が重大問題である。その二九首の中、異本系と共通する二二首について、検討を進めたい。まず、異本系四歌群との共通歌の関連を整理しておく。

流布本—A歌群(一(五)、二(四)、四(一)、一三(三二)、一五(三二)、一六(三四)、二〇(四五)、二三(五九)、二四(七五)、二八(九一)十首

流布本—B歌群(五(一〇五)、六(一〇四)、一八(一四二)、一九(一二二)、二三(一二三)、二七(一四四)、二九(一三

九) 七首

流布本—C歌群 一二(二四八) 一首

流布本—D歌群 一四(二七九)、一六(二八〇)、一七(二八二)、一八(二八二)、一九(二八三)、二〇(二八四)、二二(一

八五)、二三(二八六)、二四(二八七)、二五(二八八)、二六(二八九)、二七(二九〇) 一二首

数の上では、D歌群とA歌群が多く、B歌群が続き、C歌群は只一首と少ない。が、実は、この中には異本系の重出歌があり、各歌群個有の歌は、順に、六首・三首・一首・四首となる。流布本—A歌群と流布本—B歌群の各々四首が、D歌群と重出しているのである。

流布本と異本系A歌群とは、割合も多く共通するわけだが、その順序も、一(五)・二(四)が逆であるだけで、他は合致する。流布本の形成に異本系A歌群が何らかの形で与った、と考えざるを得ない。因みに、B歌群との共通歌の場合、その順序は全く無関係なのである。B歌群も流布本系(A)歌群も、共に、「部類歌群」であるにも拘らず、その共通歌の順序が異なるのは、両者が配列の点で影響し合っていない、ということを示している。

歌序の点で流布本と関係があるのは、D歌群である。前引のごとく、「D歌群の末尾一二首(二七九〜二九〇)は本文・配列とも第一類本部類歌群(流布本系(A)歌群・稿者注)のそれとほぼ完全に一致して」⁽⁴⁾いることが、既に指摘されているが、いま示した「流布本—D歌群」の整理で、そのことが確認できる。流布本の「一五番と二一番が異本系D歌群には無いだけで、他は、歌序が「完全に一致して」いる。その「一五番と二一番が異本系D歌群に載らない点が問題だが、その二首がそれぞれ秋部と冬部の冒頭歌である、という事実は、注意を要しよう。流布本と異本系D歌群の先後関係は、後に、本文の異同から検討を試みる。

異本系B歌群と共通する流布本歌は、七首と、多くはないが、注意されてよい事実がある。それは、異本系におけるB歌群とD歌群との間の重出歌四首が全てこの流布本系との共通歌七首の中に含まれる、という事実である。つまり、異本系D歌群の歌でB歌群と重出する歌は、必ず流布本系に載るのである。同じD歌群の重出歌でも、A歌群との間の重出の場合、必ずしも流布本とは共通しない、という点と比べると判る。この事実は、異本

系B歌群を含めた資料——前述のごとくA歌群もその一つである——によって流布本系(A)歌群が編まれ、それをも含めた資料によって異本系D歌群が編まれ、元も別の集であったそのB歌群とD歌群が併せられたために、結果として四首の重出が生じた、と解釈せざるを得ない。異本系B↓流布本系(A)↓異本系Dという形成順序である。異本系D歌群を基にして流布本(A)歌群が形成されたのなら、異本系B歌群の歌で流布本系に載る残りの三首、つまり一〇四(六)・一〇五(五)・一三九(二九)がD歌群に無いことの説明がつかない。

流布本系と異本系四歌群の共通歌について、あらましを見てみた。以下、個々の本文を比較し、以上の検討の裏付けを取りたい。最初は、異本系A歌群と共通する流布本系歌一〇首の内、D歌群との重出歌は後に見るとして、残りの五首を比較する。実は、これらは異文がごく少ないのである。

一 しらぬまにまかきの梅は折てけりそてなつかしき人をとかめん

は、異本系の五番では、第三句を「おりてとり」とし、「と」を見せ消ちとして「げ」と訂正している。異本系書写時の訂正と見ておいてよからう。

一五 むさしのゝしけみにまじる女郎花こもりしつまのこゝちこそすれ

が、異本系三二番で第二句を「しけみかなかの」とする。これが、A歌群と流布本系の共通歌の間で異文の見られる唯一の例である。

流布本系と異本系A歌群との共通歌で興味深いのは、詞書である。異本系A歌群は『久安百首』歌であるから、個々の歌には詞書が無いが、流布本系では、当然、詞書がある。

一 新院百首歌めしけるにまいらせんとて、梅を―五「春廿首」

二 新院百首歌めしけるにまいらせんとて、梅を―四「春廿首」

四 たいしらす―一「春廿首」

一三 題しらす―二「夏十首」

- 一五 草花―三二「秋二十首」
 二八 百首、別―九一「雜二十首、別一首」

一・二・二八の「百首」が、谷山氏も触れておられるように、崇徳院の『久安百首』歌であることが確認でき、流布本の形成が異本系A歌群の『久安百首』以後であることが判る。四・一三の「題しらず」というのも、詞書の無い『久安百首』歌であるわけで、納得が行く。

流布本系と異本系A歌群との共通歌で、D歌群との重出歌四首の詞書も、同じ傾向を示す。

- 一六 旅宿草花―三四「秋二十首」―一八〇「旅宿草花」
 二〇 社頭紅葉―四五「秋二十首」―一八四「社頭紅葉」
 二三 同心(新院御会に、暁千鳥―五九「冬十首」―一八六「同心(新院御会、暁千鳥)」
 二四 ナシ「恋部」ト部立名ノミ―七五「恋廿首」―一八七「恋」

要するに、詞書を見る限り、流布本は、異本系のA歌群ではなくD歌群と共通しているのである。尤も、歌語の異文は、少々様子が異なる。

- 一六 草枕たひねのとこのをみなへし一夜はかりの契とやおもふ
 とや―三四「とや」一八〇「もや」
 二〇 みかさ山いかてこの葉のみつらんしくればよそのものところ(空白)
 よそ―四五「よそ」一八四「よは」、(空白)―四五「みれ」一八四「きけ」。但、流布本系の類従本「ものと(空白)る」、続国歌大観「物とかは(空白)る」、道家大門本「本ノママ、みれ歎」ト注。
 二三 よさのうらの松風さむみね覚する有明の月にちとりなく也
 月―五九「そら」一八六「月」
 二四 つらきにもうきにもおつる涙かないつれのかたかふちせなるらん
 かな―七五「かは」(流布本系類従本モ)―一八七「川」

一六番と二〇番は異本系A歌群と流布本系が合致する例、二三番はD歌群と合致する例、という具合である。二〇番の空白は、異本系に「みれ」「きけ」の相違があり、いずれでも解の成り立つもので、流布本系で空白のままとするのは、その辺に原因がありそうである。また、種々の解釈が行なわれたらしいことが、管見の流布本を見るだけで見当がつく。二四番の異文も、「かな」と「川」の異文の間に係助詞「かは」が介在しているらしい。流布本系の中にも「かは」とする本が見られるように、これは、係助詞「かは」と「涙川」との掛詞であるわけで、「かな」では歌の面白さが半減する。「かは」に含まれる感動の意が「かな」と変化する一因と見てよい。つまり、異本系A↓流布本の筋道が推測できるわけである。

次に、流布本系と異本系B歌群との共通歌の本文を見てみる。異本系のB歌群とD歌群の重出歌四首は、後にD歌群として検討する。

山家花を

五 たつねくる花も散なは山里はいとと人めやかれむとすらん

山家花を——〇五「山家花」

はりまのかみに侍ける時、三月はかりにふねよりのほりけるに、津の国にやまちといふところに参議為通朝臣しほゆあみて侍るときとてつかはしける

六 なかあすな都の花も咲ぬらんわれも何ゆへいそく船出そ

詞書——〇四「はるころ、あかしよりのほらせ給けるに、為通卿つのくにのしほゆあむとてありと、きかをたまひてつかはしける」。船出——〇四「つなて」。そ——大門本「に」。

七月七日、白河院かくれさせたまひたりければ

二九 またもこん秋をまつへき七夕のわかるゝたにもいかゝかなしき

詞書——三九「七月七日、白河院かくれたまひにけるに」。歌——三九「秋ことにまたもあふへきたなはたもわかるゝことはいかゝかなしき」(但、右二「またもこんあきをまつへき」「たにも或本」ト注記アリ)

六番と一〇四番の詞書の相違は、大きい。二九番と一三九番の場合、詞書は、白河院に対して「かくれさせた

まひ」と最高敬語を使う流布本が妥当であろう。この歌、両者に異文が大きい。白河院の崩御を七夕の故事と重ねて詠むのだから、「わかるゝだにも」と、比較の意を強めて歌う流布本二九番の方が、單純に「わかるゝことは」と歌うより、妥当である。B 歌群一三九番を推敲したものが流布本二九番の歌形となった、とも考えられる。

流布本系と異本系D 歌群との共通歌について、一部は既に吟味したが、残りの歌について検討を加えたい。

新院百首歌めしけるに

一四 夏山のなのはそよぐくれにいくへかさねつせみの羽ころも

詞書一七九「新院御会に、夏月照河」。歌一七九上句「こほりかはなかるゝ月のさゆるよは」。

はりまのかみにてくたり給ひてあかしの月をみて

一七 思ひきやあかしのうらの月影をわかものにしてなかもへしとは

なかも一八一「なかれ」。但、古典文庫本ハ「なかる」トシ、右ニヘむカント校訂者ノ意見ヲ添エル。

故郷月

一八 いくともつきはわかしをふるさとはものさひしかるかけそゝひける

故郷月一四二「無常」。かけそゝひける一八二「かけをゝひける」。

丹後守為忠朝臣ときはにわたりて、山家曙月を

一九 ありあけの月をなかれて我ひとりいくよに成ぬみ山への里

詞書一一二「丹後殿とすはの山庄にて、山家暁月・いふこと」を。一八二「山家暁月」。

新院御会に、暁千鳥

二二 ありあけの月のでしほやみちぬらんいそつたひして千鳥鳴也

詞書一一三「千鳥」、一八五「新院御会暁千鳥」。ありあけ一八五「あけあけ」。いそ一一三「うら」。

新院御会、はしめの冬こひ

二五 さもこそはあきはてられし身にしあらめいかにしくゝ袂なるらむ

身にしし続国歌大観「身にも」。あらめー一八八「あらぬ」。

備前へ下向してのほりたりけるに、白河院御前めして、道のあひたいかなる歌かよみたるとたひく御たつね侍ければ、むろと申とまりにてかせにふかへられて曰かすつもりはへりしかは、つかまつりたるよしそうしける、

二六 花のちるはるのみとこそおもひしかふなちもかせのいとはしきかな

御前—一八九「御前に」。侍ければ—一八九「ありければ」。のみとこそ—一八九「とのみこそ」。おもひしか—続群書類従・続国歌大観「思ひしに」。ふなち—一八九「ふなて」

一四番と二二番の詞書に「新院御会」とあるが、これらは異本系A歌群に無い歌で、この「御会」が『久安百首』と無関係であることは、一・二・二八の場合とは異なるのである。

一四番の上司が大きく異なるのは、第二節に谷山氏の御見解を紹介したように、異本系D歌群の一七九番の上司がそれぞれ別の歌であることに依る。一八一番の「なかれ」は、見せ消ち訂正の「なかる」を採っても不可解で、古典文庫に「むか」^レと流布本系一七番の本文を是とする注記があるように、流布本一七番が異本系D歌群一八一番より本文の妥当性が推測できる。一八番の「故郷月」という詞書は、D歌群の一四二番の「無常」とは大異があることは、前節で指摘した。一九番の詞書は、D歌群の一八二番よりB歌群の一・二番の詞書に依っているかのごとくだが、「山家暁月」という題の焦点に変わりは無い。二二番の場合、「いそづたひ」はD歌群と同じで、B歌群の「うらづたひ」とは異なる。二五番の「あらめ」、二六番の「ふなち」は、それぞれ、D歌群では「あらぬ」「ふなて」とあるが、共に流布本の本文の方がよからう。

異本系四歌群と流布本系(A)歌群の共通歌について、本文を検討した。その結果、流布本系A歌群は異本系D歌群と最も密接な関係があり、しかも、それが、流布本→異本系D歌群という流れにあることもほぼ確実になった。流布本の形成に、現存異本系のA・B・C三歌群そのものが与った保証は今のところ無いが、流布本が、A歌群所収歌・B歌群所収歌・C歌群所収およびそのいずれにも属さない歌から成っていること、この事実だけは

間違いない。いずれにしても、異本系『平忠盛集』は、現在見る形が全体として流布本形成に関与したのではなく、四歌群が、より厳密に言うと三歌群が、個々に関与したのである。

〈五〉

『平忠盛集』の異本系と流布本系は、全体で一つの集となっているというよりも、複数の歌群それぞれが独立した集となつていているらしいことが、明らかになつてきた。本節では、それを、他集との交渉の面の検討から確認したい。

次に掲げる表が、忠盛の歌で勅撰集や私撰集に採られたものを、二種の『平忠盛集』の歌群との関連で整理したものである。各集の諸本の本文研究が必要ではあるうが、ここでは、勅撰集は『国歌大観』、『後葉集』、『月詣集』は『群書類従』、『続詞花集』は『陽明叢書』、『平経盛集』は『私家集大成』、『万代集』は『丹鶴叢書』、『夫木抄』は国書刊行会本に依つた。集によつては諸説のあるものもあるが、『和歌文学大辞典』等に依つて、おおむね成立年代の順にならべてみた。

この一覧表から、幾つかの興味深い事実が見出せる。一つは、流布本系でなければ採られるはずがないという歌は皆無である、という事実である。(諸集二見エズ)と注記した二首は別として、いずれも、異本系のABC三歌群に見られる歌なのである。流布本系(A)歌群に依つた可能性が残るのは、『後葉集』、『続拾遺集』、『続後拾遺集』、『風雅集』、『新千載集』だが、これとても、異本系との共通歌であり、そちらに依つた可能性もある。

異本系D歌群と他集との交渉も、まず無いと見てよい。『続詞花集』、『月詣集』、『夫木抄』に各一首、D歌群の歌が載るが、これらは、全てA・B二歌群との重出歌である。それに、D歌群のみに載る一七三番等の六首が他集に見えないことも、その傍証としてよい。

要するに、勅撰集や私撰集と交渉があつたのは、異本系ABC三歌群に関わる資料ということになるが、実

諸集における忠盛歌一覧

そ の 他	流布本系		異 本 系				他 集		
	(B)	(A)	D	C	B	A	番号・巻	集 名	
平家物語	30				113 118		229 253	金 葉	
今鏡	31				115		607		
(初度本ノミ)	32				138 102		661 初 74		
後葉巻 9	33	6			104 114		274 296	詞 花	
詞花 274 玉葉 2397, 今鏡		6 29			104 139		巻 9 巻 15	後 葉	
		22	185		123 127 140		巻 6 巻 13 巻 19	統詞花	
玉葉 1218, 夫木 26	37			155			112	経盛集	
(諸集ニ見エズ)		2				4	巻1月 巻1賀 巻5月	月 詣	
	34					28			
	35			168	121		65	731	千 載
続後撰 840	36						76	1550	新古今
万代巻 11	36						76	840	続後撰
		4					11	80	続拾遺
夫木巻 6, 歌苑抄							19	148	新後撰
夫木巻 26, 経盛集 後葉巻 15, 今鏡	37 38	29		155 156	139		1218 2397 2755	玉 葉	
		12		148			171	続後拾遺	
新後撰 148, 歌苑抄 (諸集ニ見エズ)			176		146	15 19 55	巻 4 巻 4 巻 6 巻 17 巻 20 巻 24 巻 26	夫 木	
玉葉 1218, 経盛集	37			155		83			
		5			105		209	風 雅	
		13					22	255	新千載

は、中には例外もある。しかも、異本系の歌群の独立性という問題と関連のある事柄も多い。さきの表を縦に見て検討を加えてみたい。

まず、『金葉集』から『続詞花集』に至る早い時期の集は異本系B歌群とのみ関連がある、という事実がある。これに対して、『久安百首』歌のA歌群は、『月詣集』以後である。A歌群は、谷山氏に詳しい検討があるように⁽³⁾、現行の『久安百首』には入っておらず、少々問題はあるが、『正治奏状』で「御製の外十三人」⁽⁴⁾の一人に忠盛が数えられており、題の出された康治二年以後、忠盛も詠進しようとしていたことは間違いない。知られるように、『久安百首』は、『詞花集』撰進のための催しであるから、『詞花集』以後の集に採られても不思議ではないのに、実際は、寿永の『月詣集』以後なのである。また、C歌群の歌は、『月詣集』撰進のための所謂「寿永百首」の一つである『平経盛集』以後と交渉があると言える。以上のごとき大まかな所をふまえて、以下に、重要と思われる集いくつかを詳しく見てみる。

忠盛歌の勅撰集入集は、『金葉集』が最初である。『国歌大観』によると、二二九・二五三・六〇七・六六一の四首が入集している。ところで、周知のごとく、この集は成立事情が複雑で、初度・二度・三度という大まかな三段階があり、本文も大幅に変化している。忠盛の入集歌も、これに応じて増減がある。松田武夫氏の御研究⁽¹⁰⁾に依ると、「初度本は、静嘉堂文庫藏伝藤原為相筆本を唯一の伝本としてゐる」のだがこれは「巻第五までの欠本である」わけで、忠盛入集歌の実態も、正確なところは判らない。松田氏が「最も最初に出来た二度本と見なす方が妥当」と言われた『続群書類従』所収の「初度本」は、表に掲げた五首を載せている。然るに、『金葉集』の撰述過程に於ける最終段階に立つ三奏本⁽⁵⁾では、この内二二九・六〇七・六六一(国歌大観番号)の三首に減じている。さらに「歌集の原本は流布本を採り諸本を校合し」という『国歌大観』では、四首になっているのである。このように、『金葉集』の場合、初度本から三奏本まで、忠盛歌に増減があるが、いずれも異本系B歌群の歌であることが明らかである。細部の本文異同も多くない。これと関連するのだが、流布本(B)歌群として「見勅撰歌」に追加されたのは、三奏本の三首であることを、ここで指摘しておく。続類従本の「初度本」で忠盛歌

が増加したことを、松田氏は「平忠盛は、白河院の信任が篤かったために……入集したものと思はれる」とし、三奏本が欠く歌について「忠盛を除いたのは、平氏が若冠であるとの理由に依るものであらうか」「忠盛が微位微官で、歌人としても未熟と見たからであらう」と言われた⁽¹⁰⁾。撰集のそれぞれに、種々の事情があったらしいということになる。

『金葉集』入集歌で、いま一つ注意してよいことがある。A歌群つまり『久安百首』は『金葉集』の後に編まれたものでありながら、『金葉集』入集歌を入れない。つまり、忠盛が、旧歌中でも秀歌という判定を受けた『金葉集』入集歌を『久安百首』に入れていないのは、『久安百首』を新しく詠んだ歌によって編んだ、ということになるわけである。

先に、『後葉集』『続拾遺集』等が、流布本系(A)歌群に依ったか異本系に依ったか、いずれの可能性もある、とした。それが、細部の本文の検討から、或る程度の結着がつけられる。『後葉集』巻九の歌は、「旅」の部だが、

播磨守に侍ける時三月はかりに船よりのほりけるにやまちといふところに参議為盛の⁽¹¹⁾

朝臣しほゆあみして侍と聞てつかはしける

なかあすなみやこの花も咲ぬ覽われは何ゆへいそくつなてそ⁽¹²⁾

の歌である。前節の流布本と異本系B歌群の比較で校異を示したのだが、この歌、詞書は流布本系と重なり、歌の本文は「われは」は他本が「われも」、「つなて」は流布本と『詞花集』が「船出」(但、笠間叢書本は「つなて」)とあり、比較的流布本系に近い。同じく『後葉集』巻一九の「哀傷」の部の歌は、

七月七日に白河院かくれさせたまひけるによめる 平忠盛

又もこん秋をまつへきたなはたの別るゝたにもいかゝ悲しき

で、これも前節で校異を示したが、異本系Bの一三九番では、上二句が「秋ことにまたもあふへき」とあり、細字で「またもこん云々」とあるなど、『後葉集』所収歌は流布本系(A)に近いのである。或いは、『後葉集』成立時

に早くも流布本系が出来ていたのかも知れないが、卷九の歌は『詞花集』二七四番と殆ど重なり、卷一五の歌は『今鏡』に載るわけで、そちらからの関係も考えられるのである。

『続拾遺集』『続後拾遺集』『風雅集』『新千載集』所収歌は、歌の本文に、所収歌・異本系所載歌・流布本系所載歌の三者で異文が無く、その関係は不明である。只、詞書を見ると、流布本系所収歌の詞書に近いのである。流布本系は意外に早い成立かも知れない。

平経盛は、谷山氏が、その家集『平経盛集』一〇九番の詞書「左京太夫俊成卿打聞せむとて故刑部卿のよまれたる歌ともを尋侍しかは、遣とて」から、「経盛が父忠盛の遺詠を蒐集整理」したのではないかと推測された人物である。その『平経盛集』の一―二番に、異本系C歌群一五五番の歌が採られている。⁽¹⁶⁾

善 壽

いつくしまの社へまうて侍し時、むしあけといふ所にとまりたるに、ふるき堂の柱に皇后宮亮忠盛朝臣かゝれたる歌あり
むしあけのせとのあけほのみるをりそみやこのこともわすられにける

井 犬

という歌だが、『平忠盛集』異本系一五五番では、詞書が「備前にくたりけるに、むしあけのせとのたうにかきつけはへりける」とあり、「みるをりそ」は「みるときは」、「ことも」は「ことそ」と小異がある。いずれが先行するか、決め手が無い。因みに、この歌は『玉葉集』『夫木抄』にも載るのだが、その本文は、『平忠盛集』よりも、『平経盛集』に近い。

『月詣集』には、忠盛の歌が三首載る。卷一月と卷五月に、『久安百首』歌の異本系A歌群歌が「題しらず 平忠盛朝臣」として載るのだが、(諸本ニ見エズ)とした卷一賀の、

上西門院うまれさせおはしましたりけるつるうちにまゐりて侍りけるにみすのうちよりしるきうすやうに御すゝりをくしてさしいたされたりけるによみてかきつけ侍りける 平忠盛
あさひさす春日の山の姫小松けふや千とせのふつかなるらん

は、注目される。井上宗雄氏が「大治元年七月廿三日鳥羽皇女統子生れる。……忠盛弦うちに参り、詠歌」⁽⁷⁾とさ

れた歌で、詞書の内容から見て忠盛歌と判定してよいものだが、この歌のみ「平忠盛」と「朝臣」を添えていないのは、他の二首が『平忠盛集』A歌群から採られたのに対し、これが他の資料から採られた形跡であろう。

『新古今集』に唯一首採られた歌は、異本系B・C歌群の重出歌で、流布本(B)歌群との共通歌だが、

遍昭寺にて月を見て

すみきけむかしの人は影たえて宿もるものは有明の月

である。第三節で校異は示したが、詞書が、B歌群は「あれたるやとの暁月」でC歌群は「遍昭寺にて」、歌の初句が「すみきけん」と「すたきけん」と、異文があり、『新古今集』との交渉は結着がつけにくい。この歌が、経盛や忠度が「昔」をしのびつつ月の歌を詠んだ『遍昭寺歌合』⁽¹⁷⁾の歌であれば、C歌群の詞書も納得が行く。B歌群の詞書からは、寛朝上人の遍昭寺は窺えないわけで、『新古今集』はC歌群と交渉があつたと見える。

『玉葉集』の二首を見てみる。その一二一八番は、『経盛集』との関連で、既に検討したところだが、異本系C歌群の一五五番よりも『経盛集』の方に、詞書も近い。二二九七番は、異本系B歌群と流布本の共通歌として第三節で検討し、本節でも『後葉集』との関係を検討した、白河院崩御の歌だが、異本系の二二九番よりも流布本系の二九番に近い。二七五五番は、詞書に小異があるが、C歌群所収一五六番と同文で、いずれとも決めがたい。『玉葉集』所収歌が三首の中の二首一九五・六と並んでいるのは、やはり、C歌群との交渉が大きかったからであろう。『風雅集』入集歌が、異本系B歌群と流布本との共通歌で、相互に異文はなく、どちらとも決めがたいのだが、『玉葉集』の二二九七と傾向は似ている。いずれにせよ、『玉葉集』と『風雅集』がA歌群つまり『久安百首』歌と無関係であるのは、撰者が、京極家だからということが関わっているのであるうか。

『夫木抄』には七首が採られている。巻四の「花」の「あはちしま」の歌は、異本系一七六番とは異文があり、A歌群一五番と合致する。巻二六の歌は、C歌群一五五番とは異文があり、前述のように、『経盛集』や『玉葉集』に近い。つまり、『夫木抄』は、異本系のA・B二歌群しか見ていないのである。しかも、巻六の歌は『海

辺藤花 平忠盛朝臣」、卷二〇の歌は「いはしる山(紀伊)くまのにまありけるととき 平忠盛朝臣」、卷二六の歌は「むしあけのせと 平忠盛朝臣」(但、左注に一五五番に近い本文が載る)とあるが、他は「家集 忠盛朝臣」とある。詞書を載せるか載せずに「家集」とするのみか、「平」の姓を付すか付さないか、この差が呼応しているのは、『平忠盛集』に依ったか依らないかの差ということになる。つまり、『夫木抄』は、卷四の二首、卷十七、卷二四の都合四首のみ、しかも、A・B歌群のみの『平忠盛集』に依り、他は、別の資料に依ったのである。

他の集についても、言及したいことが多くあるが、このあたりで止めておくとして、忠盛の歌で勅撰集や私撰集に採られた歌を検討してみると、やはり、『平忠盛集』の歌群という単位が無視できないことが判ってきた。他の集との交渉関係が、集全体としてではなくて、歌群として行なわれたらしいこと、また、歌群ごとの成立年代が違うらしいことも見えてきた。ここで、『平家物語』と『今鏡』に関わるのは異本系B歌群のみであるという事実を、申し添える。

〈六〉

煩雑にわたった本稿のあらましを整理し、問題点と、今後の課題とを明らかにしておく。

本稿では、まず、谷山・井上両氏の御研究をたどり、『平忠盛集』の異本系と流布本系の歌群の把握方を整理した。次に、異本系の重出歌を検討し、各歌群が独自の集と見える程のまとまりがあるという見当をつけた。次いで、流布本系と異本系とを比較し、流布本が異本系のA・B・C三歌群その他から歌を抄出して編まれ、しかも異本系D歌群の基礎資料の一つとなっていることを示した。ここでも、二種の『平忠盛集』は、各歌群がそれぞれ独自の結びつきを持っていることが判った。続いて、勅撰集等の他集に採られた忠盛歌の検討からも、『平忠盛集』全体としてでなく、歌群単位で忠盛歌が他集と関わったことが判明した。

以上を要するに、種々の検討を通じて、『平忠盛集』は、異本系も流布本系も、現存本の全体が一まとまりな

のではなく、各歌群が独立したまとまりのある集であることを示してみたのである。

以上の検討の間に、各歌群つまり各々の集の先後関係も、見当がついてきた。おおむね、異本系B、異本系Aか異本系C、流布本系(A)、異本系D、の順序である。『私家集大成』の「まずAB歌群が整理され、やや後にC歌群、ついでD歌群が追加されて成」ったという推測とほぼ重なり合う。流布本系(B)は、今のところ、どこに位置するかわからない。因みに、日本本は「D歌群にあたる部分が全くない形になっている」⁽⁴⁾。由だが、本稿の検討から言っても、「D歌群追加以前の形態を示す」ということになってくる。尤も、日本本の本文は未見で、調査の機会を得て、検討を加えたい。

勿論、『平忠盛集』は他撰であろうから、以上は、現在見る歌群そのものの形成順とまでは言えまい。が、これが、言及する紙幅はないが、谷山氏が『古典文庫』の解題に付された忠盛の略年譜と或る程度まで応じ合っていることも、事実なのである。

異本系は四歌群つまり四つの集が併せられ、流布本系は「見勅撰歌」という歌が集められて付載されているという意味で、共に、集成本である。本稿の冒頭で、谷山氏の御発言を承けて、所載歌数の点からは、異本系を流布本系を略本と呼び得る、としたが、歌数は別にしても、四つの集を併せた異本系を広本、三つの集を他から歌を抄出した流布本を略本と、形成事情からも、呼ぶことができそうである。

ところで、各歌群が独立した集であると述べたが、独立した集ならば、個々の歌と集全体とからする、素材と構成と主題とがあるはずで、そのことを吟味せずに、専ら歌の出入りと本文の差異とから、かようなことを言うのは、乱暴であり、順序も逆であることは承知している。が、今は、稿者の現在の見通しだけを披露しておく。

A歌群は『久安百首』歌として、それ独自の構成と方向がある。B歌群は、井上氏の御発言を引いたような構成を持つかなり伝統的な定型の部類本である。C歌群は雑纂だが、男であれ女であれ、とにかく人を想う歌が多い。D歌群は、旅の歌・歌枕の歌を集めた観がある。流布本系(A)歌群は、抄出本であることも与ってか、種々の要素を含んで部類されていると言える。勿論、各歌群の中には、この把え方から外れる歌もある。しかし、歌

群全体の傾向・方向をかように把えてその歌を見ると、附会となるかも知れないにしても、とにかくそれに応じた解が可能になる、ということも、また、厳然たる事実なのである。

これらの問題は、改めて、詳しく検討してみたいと考えている。その検討のために、『平忠盛集』が、その本文流動の面でも、各歌群がまとまりとして独自性・独立性を主張しているのだ、ということ明らかにしておきたかったのである。本稿の題を「本文考」とした所以である。

- (1) 巻第四百四十、和歌部七十五。洋装本、第十六輯上。
- (2) 但、『見勅撰歌』は、(今省、唯記国歌大観番号)とするのみ。
- (3) 『未刊中古私家集二』、樋口芳麻呂氏と共編。第一八八冊。昭和三八年3月刊。
- (4) 中古II、所収。黒川昌亨氏と共同担当。昭和五〇年5月刊。
- (5) 『人文研究』、昭和三〇年6月。
- (6) 『和歌文学の世界』第一集。昭和四八年7月。
- (7) 笠間叢書一〇〇、昭和五三年10月。
- (8) 『私家集大成』の歌番号に従う。他集等も、公刊された文献の番号による。
- (9) 佐山济氏担当。昭和三七年11月刊。
- (10) 松田武夫氏『金葉集の研究』(昭和三十一年10月刊)に依るところが大きい。
- (11) 巻第六十九、和歌部二十四。洋装本第一〇輯による。
- (12) 谷山氏は、注5の御論で、「最後の二首(内一首長歌)が落丁その他の事故によって脱落したから」雑の部が「十八首しかない」とされた。
- (13) 国歌大観本・統群書類従本・津山市立郷土館蔵・道家大門旧蔵本など。
- (14) 巻第二百九十三。洋装本第十六輯による。
- (15) 井上宗雄・片野達郎阿氏校注。東北大学附属図書館蔵、三春秋田家本を底本とする。
- (16) 『私家集大成』中古II、所収。神作光一氏蔵本による。
- (17) 『平経盛集』五六番、『平忠盛集』四七番、『平安朝歌合大成』四一七。

へ付言）本稿は、稿者担当の本年度講義「日本文学講読Ⅴ」の成果の一部である。演習に参加した受講生諸君より、多くの示唆を得た。記して謝意を表わす次第である。